

環境と状況の違い、 そして「できる状況づくり」

佐藤 建吉 SATO Kenkichi

一般社団法人 洗楓座 代表理事

本稿では、環境問題の解決における主体者の重要性を述べる。極論ではあるが「環境」という用語に替えて「状況」という用語を多用することを唱えてきた。この論点の視座は、「主体者」の有無にある。残念ながら「環境」という用語には主体者の関わりがなく、その周りに注目する。「環象」に回帰する。主体者を加えた「環境」として、筆者が見出したのは「状況」である。主体者が深く介在し関与することにより、環境問題が解決に加速する。関連で、主題としての「できる状況づくり」は、いま、そのためのキーワードとなる。

はじめに

私たち人間は、自然の中で生き、暮らす。人間の活動の多くは自然への働きかけである。科学技術が主導する今日においても、開発される人工物の多くは自然に由来し、かつ、その副次品である。こうして、人間の自然への作用が継続する。その結果、いわゆる環境問題が生じ、なおその解決のための努力が必須となっている。それは、持続可能な開発目標（SDGs）という人間の存在を度外視することはできない活動への参画が求められている。

環境問題の解決は、現実の認識とその後やってくる結果をいかに事前に把握し、対策や対応するかに要点がある。それは、「現実の理解」と、「目標の設定と実践」という二つの位相の認識が必要となる。理解することは、ある面において容易であるが、設定と実践には、困難が伴うことが多い。後者は、経済的な側面、旧来の慣習や生活様式、そして規則や法律が障害となることが多い。

一般的な意味で、「環境問題」という言葉は周知で、その必要性についても理解している人が多い。それは、環境先進国と呼ばれる我が国の一般国民の理解であるが、政治的あるいは指導的な立場になると、ジレンマやトリレンマが登場し、アクセルとブレーキの両踏みになり、ハンドルを切る方向もぐらつく。

本稿では、そうした「状況(=状況)」にある「環境問題」の解決のための、心的、芯的、そして沁的な評論を試みたい。それは、自らが心身ともに成長しなければならぬ一部に障害をもつ若者に対象とされた教育のモットーであり、まさに期限付きの社会や世界に責任を持たなければならない「人間」が持つべきモットーでもある。それは、「できる状況づくり」である。

1. 「できる状況づくり」とは？

この言葉「できる状況づくり」を知る人は、少ないかもしれない。これは、特別支援教育の教師の中で用いられる教育の合言葉である。実は、筆者がこの言葉を知ったのは、いまから12年ほど前、2008年ごろであった。当時は不思議さを感じた合言葉（モットー、キーワード）であったが、その意味を考えると、重要なメッセージが込められていることを理解し、その必要性和汎用性を評価し、その後、いろいろの方面や場面に適用している。

具体的な好例は「地域活性化」ではないだろうか？ いわゆる「東京一極集中」により、地方は疲弊の一途をたどっている。その解決には、地方の主体性が求められる。そうした考えが、以下に述べるように「できる状況づくり」という言葉が問題解決の糸口と活力を与えてくれる。

筆者は、かつて千葉大学の学部や大学院で、「都

市環境システム」という分野の教員であった。専攻を広範囲とし、現在の一般社団法人 洗楓座の名前に盛り込まれているように「風車や風力発電」についても教育研究対象としていた。ある日、千葉大学教育学部の特別支援学校の担当教諭から風車製作の指導をしてほしいと訪問を受けた。同校では、年度末に毎年の恒例行事として、特別支援教育の研修会を主催しているという。研修授業のテーマを、中学部の生徒たちに選ばせたら「風車」になったという。環境教育とものづくり教育の一環である。

その要求には了解と、さっそく取り組みが始まった。研究室の卒業論文や修士論文の学生にも関わってもらい、未来を先取りした風車の製作をテーマにした。それは、生分解性材料でつくられた羽根をもつ風車である。将来は、環境問題のためにこの素材の羽根がスタンダードになり、日本で最初に、特別支援学校に学ぶ自分たち生徒が、その端緒として風車をつくったのだとの体験は、大人になってからも自信と誇りになるだろうと意図し配慮した。

翌年の2月になり研修会が開催され、全国から特別支援教育の教師たちが、千葉大学の特別支援学校に参集した。わが中学生たちは、藍染めの小屋の屋根に自作・組み立ての風車を掲げ、その回転する様子に歓喜した。

筆者も招待されて研修会に参加し、教師たちのプレゼンを拝聴した。多くの教師が「できる状況づくり」という言葉を用い、教育のあり様を説明した。そして自問した。なぜ、この教師たちは、「できる環境づくり」と言わないで、「できる状況づくり」というのか？と。「状況」よりは「環境」のほうが耳あたりがよく、なじみがあるからである。しかし、「状況」という言葉を肯定して答えを見出すと、なるほどと、合点した。

つまり、「できる環境づくり」では、教師は周りの手立ては準備し整備するが、生徒に実践する動機付けにはならないのである。特別支援学校の生徒は、発達が遅れている子も多い。しかし一面には優れた能力を持つ

子もいる。課業と関心が一致しないと遠慮なく飽きてしまうことが多い。したがって、飽きずに課業をやり遂げる達成感を体験し身に着けさせることが、教育のモットーとして必要になるのである。そこで考え出されたのが「できる状況づくり」であった。

これはその後に知った事実であったが、研修日の当日は、「環境」という言葉には、なるほど主体者である生徒が含まれておらず、「状況」という言葉にすれば生徒を取り込むことができると気づいたのであった。このことを、夕方の懇親会で、教師たちに聞いたが、大方は「そういう意味合いがあったんですか、自分たちは教育のモットーとして、ただ習わしとして使ってきた」とのことであった。

「できる状況づくり」を生み出したのは、元・千葉大学教育学部教授・附属養護学校校長、当時・植草学園大学学長の小出進先生であった。その後、機会を得て直接会い、上述の筆者の解釈について確認した。小出先生も現場の教師たちと同様に、主体者についての想定はされていなかったようであったが、頷いてくれた。

特別支援学校の教育としては、小学部・中学部・高等部までで大学部はなく、18歳までしか学校には在籍できないので、在学中に卒業してからの仕事を努められる（勉める、勤める）ように、主体的に満足感や達成感を身に付けさせる教育的工夫に根差した合言葉であった。この「できる状況づくり」は、後述するように教育以外の多くの問題解決の手段にも、同様のポジティブな合言葉（モットー）となる。

2. 「環境」と「状況」の違い

上述のように筆者は、環境と状況を、その環境（すなわちその対象とする場）における主体者（主体）の直接的な有無（順番からは無有）としてとらえている。図にして示すと図1、図2のようになる。

主体者（あるいは主体）を、筆者は重要な視座と考えるが、「環境」についての一般的な解釈は表1のようであ

図1／「環境」は、主体（者）の周囲にあり主体（者）とは相補関係にある



図2／「状況」は、主体（者）とその周囲（環境）を含む



る(表1)。

すなわち、図1に掲げたように、あるものの外界やまわりに目が向けられており、その主体には関心が向けられていない。

また、『ウィキペディア(Wikipedia)』では、表2のように書かれている。人間を中心とする生物・生態系を取り巻く環境と述べてはいるが、この場合も、主体についての重要性には言及がない。

『ウィキペディア』による「環境」の説明では、「環境」という用語の訳出起源について述べており、興味深い(表3)。すなわち、「環境」という用語は1900年以後であり、それ以前は「環象」、「外界」であったという。この中で、「環象」の「象」という字は、「像」とも当てられたはずであるが、人偏のない「象」であることは、主体者である人間の関与を排除しており^{*1}、「外界」との意味合いが強かったものと理解できる。

表1/『デジタル大辞泉』の「環境」についての解釈

- ①まわりを取り巻く周囲の状態や世界。人間あるいは生物を取り囲み、相互に関係し合って直接・間接に影響を与える外界。
- ②コンピューターのハードウェアの性能と、搭載されたソフトウェアの性能、ならびにそれらが複合的に集まって作り出している状態を①にたとえたもの。オペレーティングシステムの種類、CPUの動作周波数、搭載したメモリーの容量、ネットワークの状態など、さまざまな要素によって変化する。
- ③周囲の境界。四方のさかい。まわり。

表2/『ウィキペディア』による「環境」についての解釈

環境は、広義においては人、生物を取り巻く家庭・社会・自然などの外的な事の総体であり、狭義ではその中で人や生物に何らかの影響を与えるものだけを指す場合もある。特に限定しない場合、人間を中心とする生物・生態系を取り巻く環境のことである場合が多い。

表3/『ウィキペディア』による「環境」についての訳語の起源

環境は「environment」の訳語として、全国高女協会理事長で大日本優生会の創始者でもある市川源三が、1900年に「パーカー氏統合教授の原理」初出でそれ以前は、「environment」の訳語として「環象」、「外界」などが使用されている。

3. 「環境問題」vs「状況問題」

さて、「はじめに」で述べたように、環境問題は、私たち人間との関わりにおいて生じたものである。しばしば指摘されるように、産業革命以降にCO₂の排出量が急激に増加し、今日の地球温暖化の因果関係として指摘されている。また、多くの環境問題が挙げられている。例えば、水質汚濁、大気汚染、騒音、植林の伐採と枯渇、さらには砂漠化、また地形の景観変容など、私たちの暮らしや産業、すなわち社会と密接である。環境問題の顕在化は、文字通り目に見え、耳に聞こえ、鼻を刺激し、身体や命を蝕んだ。

その対策が環境問題への解決であるが、環境への対応が配慮され、やがて規制され、先進国ではそれが必須対策として理解されるようになってきた。「環境管理」(環境マネジメント)は、その要となる。環境基準や環境マネジメントを制定し、規制や罰則を設けたりされる。また「環境保護」という思想的な意識行動による環境対策も重要である。その背景には、環境哲学という学問から環境倫理学、環境経済学、環境政策学などとして研究や議論がなされている。

環境問題の解決にはそれは、さきめて人間的な関与を必要とする。それは、自然任せでは処理できないので、「持続可能性」が問われ、その危機感が予測されるからである。同時に、個人としての人間の関わりが求められる局面でもある。具体的には、省資源・省エネルギー・ゼロエミッションなど3R行動が求められる。

したがって、環境問題の解決には、「環境」として外界や周囲に意識するだけでなく、主体者自身が問題解決に参画しなければならない。それは、図2に示したように、環境と主体(者)を含んだ概念であり、新しく適切な呼び名が求められる。

その呼び名として、筆者が選んだのが「状況」(situation/circumstances)という用語である。「状況」は、哲学の用語でもある。現代実存哲学では、「状況とは主体なしには存在しえないものであり、客観的ではなく主観的な視点で見られるような現実である」といわれ、環境問題も主体者としての心理無しには、解決できない。また、「主体は状況のうちで行為することによって状況を変化させ、別の状況へと移行することができる。つまり目的意識をもって行為することで、状況を創り出し、自らの望む結果をもたらすことができるのである」といわれ、人間の意識が、環境問題の解決への糸口であると演繹することができる。

「環境問題」の解決には、「できる状況づくり」が必須であるといえる。それは、主体者の関わりが、対象に対する「限界状況」をつくるものであり、それには、空間、時間、人間(心理)の三つの「間(はざま)」が関係している。

4. 「問題」とは？——それは「夢」&「工」

「環境問題」とは、上述のようにしばしば用いられており、無意識の概念になっている。ここで、「問題」について、考えてみよう。

「問題」は、図3のように「現実」と「理想」のギャップをいう。すなわち、現実を目線を置いた場合、望ましい理想の状態を考える。そこには、ギャップがある。そのギャップを無くするようにすることが、「問題解決」となる。それは、夢を意識するとわかりやすい。現実のいま、そして将来の状態を思い浮かべることが、夢である。夢を描くことが必要であるが、それは夢見ることである。その理想に向けて、行動することが課題とされる。どこで、いつまで、どうして、が目標とされる。その実現が、夢の実現である。

これはまた、モノづくりにも例えられる。不自由な日常、それが現在の現状であるとき、その不自由さを解消するための何かの商品やモノが欲しい。そう考えると「現実」と「理想」が設定される。それは、図4のように描かれる。現実には下にあり、「地」とみなされる。「理想」は上にあり、「天」とみなされる。地には、利用可能な材料や技術がある。天には、必要で欲しい求めるものが描かれてある。現実の材料や技術でつくり上げる。すなわち天と地を（理想と現実を）をつなぐことが、モノづくりである。それは、実は、工学部の「工」という文字の成り立ちであるという。わかりやすい会意文字である。

現実を理想とすべく、現実(天)と理想(地)をつなぐのが「モノづくり」が、「工」であるが、モノづくりのために、材料や道具を準備し配置することは、「できる環境づくり」であるが、作り手の技や技術、そして経験を積むことで、「できる状況づくり」となる。「環境問題」の解決にも、人間の関わりを継続して解決に向けさせる(主導させる)「できる状況づくり」が欲しい。

5. 「できる状況づくり」の適用

以上、特別支援教育のモットーである「できる状況づくり」という言葉から多くのことを知りえた。まとめると、その適用に広がりができるだろう。

- ① 20世紀初頭から「環境」という用語が導入され、産業や社会の変化、いわゆる発展に呼応して「環境問題」が顕在化し、「環境」についての意識が広まった。
- ② 「環境問題」では、「環境」が何を主題にしているかを明確にしなければならない。環境問題の解決には、英語のtheをつけて、対象を限定して考える必要がある。一般論として「環境」や「環境問題」では、「環境問題」の解決はない。
- ③ 「環境問題」の解決とは、「問題」がそうであるよ

図3/ 問題の意味と問題解決の図式表現。この図式は、「夢」と「夢実現」にも合致

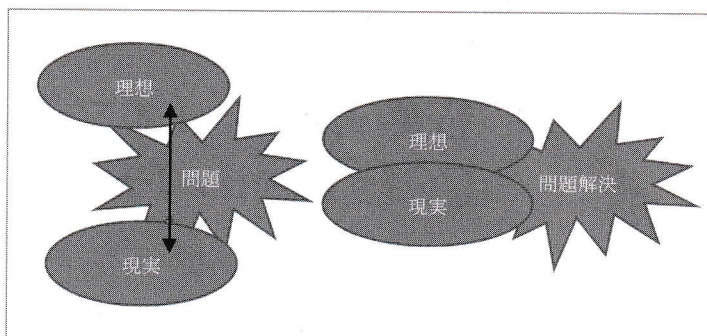
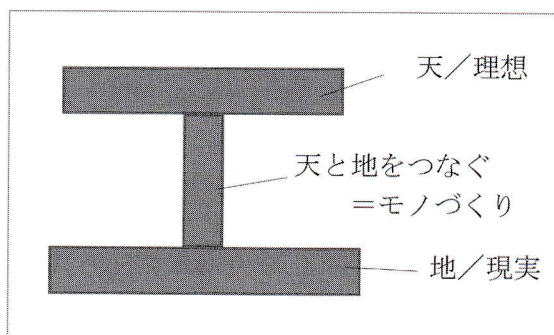


図4/ 「工」の字の成り立ち



うに、現実と理想(目標)を明確に定め、②のtheのついた対象の乖離(ギャップ)を無くすることである。

- ④その乖離(ギャップ)を無くするためには、環境のほかに主体(者)が関与した「状況」とを捉え、主体者が意識して対策行動をとることが重要であり、また必須なことである。
- ⑤「できる状況づくり」は、「できる環境づくり」に主体者を取り入れた行動を引き出した問題解決方法であり、特別支援教育の実践のほか、地域活性化活動、環境問題の解決などのほか、多くの問題解決の局面で適用できる。

*1 生圏倫理学「エコエティカ」の提唱者である哲学者、故・今道友信氏は、「現象」という用語は「像」ではなく「象」であり、「想像」は「象」ではなく「像」であることは、人偏が人間の関与に由来すると述べている。

【参考文献】

- 1) 特別支援教育における支援の最適化「できる状況づくり」Q&A、千葉大学教育学部附属特別支援学校／子ども主体の教育研究会編、ISBN:9784990119775
- 2) 自然エネルギー利用のできる状況づくり—見える化・分かる化・出来る化—第1回創エネ・省エネ研究会セミナー(2013年)
- 3) 新エネルギー新聞連載コラム「エネルギーの源⑩」『「環境」vs「状況」、そして「できる状況づくり」とは?』第31号7面(2015年7月27日(月)発行)
http://www.kofuza.jp/images/nen_31.pdf
- 4) 環境とは?
<https://www.weblio.jp/content/%E7%92%B0%E5%A2%83>
- 5) 環境
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%92%B0%E5%A2%83>
- 6) 岩崎大、『ヤスパース哲学とケア倫理』
<https://www.toyo.ac.jp/file/kiyo/pdf/45/iwasaki.pdf>